

親鸞における時の転換

——臨終から現生へ——

武田 未来雄

親鸞は、『末燈鈔』で「真実信心の行人は摂取不捨のゆへに正定聚のくらしいに住す。このゆへに臨終まつことなし、来迎たのむことなし」（定親全三・五九頁四―五）と述べている。つまり、それまでの浄土教信仰の形態であった、臨終来迎を待望することについて、その必要が無いと言われている。真実信心の行人は、信心を得れば、すなわち無碍光如来の摂取不捨の利益にあずかり、現生に正定聚の位に住するのである。ここに、往生浄土の在り方の変遷、つまり臨終から現生へと、救済の時の移行を見ることができ。しかし、「臨終から現生」とは、単に救済の時が未来から現在へと移行したこのことを指すのであろうか。親鸞は、『化身土巻』の三願転入文において、臨終を願う諸行往生の在り方から、善本徳本の真門を経て、真実信心の選択の願海へ入った経緯について、「転入」という言葉を述べている。とするならば臨終から現生というのは、単に救済の時が未来から現在に移ったのではなく、そこに一つの転換があるのではないだろうか。つまり臨終か

ら現生というのは、ただ救済の時が現在に近づいたというのではなく、臨終と現生はそれぞれ異なる時間の流れの中で捉えられ、「臨終から現生へ」というのはそこに時の転換があると考えられるのである。そこで小論は、諸行往生と真実信心がどのような時の流れにおいて捉えられているのかを明らかにし、親鸞が「転入」と述べた含蓄深い意味内容について、時の転換という視点から考察してみる。

『末燈鈔』で「諸行往生」と位置づけられている、「臨終来迎を待つ」というのは、すでに本願の第十九至心発願の願文において、「壽終の時に臨んで、たとい大衆と圍繞して其の人の前に現ぜずば、正覚を取らじ」（定親全一・二七〇頁四―五）と誓われていることである。その具体的様相は、『観無量寿經』に教説されている、定善・散善の行を回向して往生を求願し、仏の来迎を期待するものである。そのような行を回して往生浄土を求める回向とは、「回向発願心釈」において「過去および今生において修する善根」と言われ、過去・現在に

修した善根を未来の往生浄土にふりむける時間の在り方であることが窺われる。⁽²⁾親鸞は、この諸行往生について、「如来の異の方便、忻慕浄土の善根なり」（定親全一・二七六頁五）と述べている。つまり、諸行往生とは、衆生を真実に導くための手だてであり、人々をして浄土を慕い忻わせるための方便であると言われる。こうした定散を回して浄土を求める在り方は、過去に様々な行為を為して未来によりよい結果を求めたための方便と位置づけられている。過去・現在から未来に向かうという時間の方向は、日常的であり、世俗的な時間の流れである。如来はそのような衆生の時間の在り方に応じるということが窺われる。例えば「真仏土巻」に引用されている『涅槃經』には「仏性未来」ということが述べられている。それは、「仏性はなお虚空の如し。過去にあらず、未来にあらず、現在にあらず。一切衆生に三種の身あり。いわゆる過去・未来・現在なり。衆生、未来に莊嚴清浄の身を具足して仏性を見ることを得ん。是の故に我、仏性未来と言えり」（定親全二・二四〇頁三一六）と言われ、ここでは「仏性には過去・未来・現在の三世の時は無く、世俗的な時を超えているが、衆生は過去・未来・現在という時間に生きる存在であるので、それに応じて〈仏性未来〉と述べた」と言われている。つまり、如来は衆生の過去・未来・現在の時間に生きていく在り方に応

じることが述べられているのである。人間は常に何かを求め、過去に様々に為した行為に執着し、未来により良い結果を求めようとする。浄土の要門とは、このような常に時間にとらわれ、時間に流されて生きる衆生に應じて、開かれたのである。

その諸行往生について、親鸞は「化身土巻」に曇鸞の『浄土論註』の真実功德の文を引用することによって、問題を提示する。そこでは「一には有漏の心従り生じて法性に順ぜず。いわゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、若しは因、若しは果、皆是れ顛倒す、皆是れ虚偽なり。故に不實の功德と名く」（定親全一・二八六頁六―八）と言われている。衆生が自力で修した功德善根は、有漏心より生じた功德であるから、みな顛倒し、虚偽であるということが表されているのである。人は未来に理想を描き、それにむかって努力をするが、そうした画かれた理想がいかに崇高であろうとも、人間の手で行う限り、有漏心より生ずる因果であり、虚偽の範囲を出ない。業縁に依る存在である限り、必ずしも善業をふりむけることが出来るかどうかは確定出来ないのが衆生である。故に、たとえ臨終における正念を、真摯に、痛切に願おうとも、いかなる縁によつて、正念に往することもなく命を終えてしまうか、わからないのである。

過去・現在に修した善根によつて未来の結果を求める在り

方は、人間の思い計らしいの範囲を出ることができない。この衆生の在り方自体を換えなければ真実に仏道は成就しないのではないだろうか。故に、専修念仏門に帰しても、そうした自身における自力のはからいの時間の在り方が問われなければ、念仏を称えることについても、また諸行と同じように捉えられてしまうことが窺われる。それが方便の真門として、第二十願を根拠とする往生として示されている。方便の真門とは、「罪福を信じて念仏する」⁽³⁾と言われ、善因衆果・悪因衆果の道理から、善本である念仏によつて未来の福を得ようとする、自力念仏の在り方である。これは過去・現在から未来へ流れる時間によつて修せられる念仏である。「本願の嘉号をもつて己が善根とする」(定親全一・三〇九頁三)と言われるように、罪福を信じる心によつて修する念仏は、本願の名号までも自分の善根とする、自力の執心の深さを表している。このように日常的・世俗的な時間の流れである、過去現在から未来を求めるといふ時間の流れから仏道を求めても、そこには限界がある。真実の仏道における救済のためには、そのような時間の流れとは全く違う、時の転換が必要となるのではないか。それが親鸞が開顕する本願力回向の仏道なのである。

親鸞は、本願の行信について、「もしは行、もしは信、一事として阿彌陀如来の清淨願心の回向成就したまう所にあらざ

親鸞における時の転換(武田)

ることあることなし」(定親全一・一一五頁一二)と言って、衆生の有漏業で修する自力とは全く違うことを表している。そして、「涅槃の眞因は、ただ信心を以てす」(同右)と言われ、涅槃にいたるための真実の因はただ信心のみであると明かされる。この現在の信心の成就の背景、過去にはどのような時があるのだろうか。如来が信心を回向成就した、その歷程を表す三心釈の文には「無始より已来た乃至今日今時に至るまで」(定親全一・一一六頁二〇〇七頁二)、あるいは「不可思議兆載永劫」(同・一一七頁二)といった、日常の時間では捉えきれないような長い時間が語られている。こうした「無始已来」や「不可思議兆載永劫」という時は、人間の日常の間では計ることの不可能な時間の流れである。それによつて、衆生は無始已来の迷いの存在であり、信心は、自力のはからいで得るものではなく、如来の不可思議兆載永劫の修行によつて回向成就されたことが示される。では眞實信心を得るところに開かれる未来はどうであろうか。

眞實信をえたる人は大願業力のゆへに、自然に淨土の業因たがはずして、かの業力にひかるるゆへにゆきやすく、先上大涅槃にのぼるにきまりなしとのたまへる也。…中略…自然といふは行者のはからいにあらずとなり。

(尊号眞像銘文・定親全三・八〇頁一一五)

と、眞實信心の人は行者のはからいではなく、如来の大願業

力によつて自然に無上涅槃に至るのである。このように眞実信心における時間の流れは、自力のはからいで得ようとする未来とは全く異なり、大願業力に依つて、自然に、浄土の業因に違わないで、無上涅槃にのぼることである。そこには「化身土巻」で確かめたような過去や未来へのとらわれもなく、本願力の、自然なる信一念の時に、一切のはからいを捨てて我が身を任すのみである。故に眞実信心は臨終の時を待つ必要が無いと言われるのである。

しかし、衆生には日常的な時間も存在する。ただ本願の自然の時のみに、我が身を任せて生きることが出来ないのが、衆生の現実である。そこで「時の転換」が重要なのではないだろうか。「転」とは、「悪を転じて徳を成す」（定親全一・五頁五）と言われるように、悪が悪のままに徳を成すことである。あるいは「転ずとは罪を消し失わずして善になる」¹とも言われている。転とは、その転じる対象を失えば、転じた結果の在り方も無くなる、不二の關係を示している。従つて時の転換とは、臨終を求めるような日常的な時間の流れを消し失うのではなく、その自力のはからいの時が転換して、本願力自然の信心の時が開かれるのである。衆生は、日常的な時間の中で、自分の過去・現在に成す行為に眞実の可能性を錯覚し、それによつて未来の往生浄土を求めようとする。だからこそ、衆生は「無始より已來た一時も眞実なることは全く

無い」と言われ、「如来は不可思議兆載永劫の修行をし、眞実信心を成就し、衆生に回施する」と、信心が回向成就されたことの意義が述べられる。こうした衆生の過去や未来に執着するような日常の時間が無ければ、眞実信心の成就の意義も開かれないのである。時の転換は、日常の時間を離れるのではなく、どこまでも衆生の在り方に即して、その時間の内実を対象化し、信心の時へと転換することである。

臨終から現生へという時の変遷は、ただ救済の時が変わつたことではない。自力のはからいで求められる臨終から本願力自然の時へと転換することが、親鸞が明かした「臨終から現生」ということであるのである。

1 『定本親鸞聖人全集』法蔵館、一九八一年（以下定親全と略す）三〇九頁四—八

2 化身土巻・定親全一・二八二頁七—一〇

3 「然るになお、罪福を信じて善本を修習して其の國に生まれんと願ぜん」（化身土巻）定親全一・二九六頁三一—四

4 特に転の意義を詳しく述べたことを伝える『唯信鈔文意』を参照。『眞宗聖教全書二巻』大八木弘文堂、一九五八年・六二三頁九

It is said that “The Answer to the Kamakura Second Degree Zen Nun”(hereafter (1)) and “The Answer to Tsunoto no Saburo Entering the Way” (on September 18) (hereafter (2)) were written by Hōnen-bo Genkū. Because there are some similar sentences in them, it seems that one preceded the other.

The purpose of this paper is to examine which one was written first. I conclude that (2) was written first, then (1) was written relying on (2) by a later and different writer.

Having compared the contents of two letters, I have found that some sentences in (1) are out of context with (2). I have also found that some of the first half of each sentence are extremely similar, while the corresponding second halves are completely different. Therefore, I suppose that these two letters were written by different writers.

37. Zonkaku and the *Hōonki*

Kyoko TATSUGUCHI

Zonkaku (1290-1373) was the fourth generation descendant of Shinran, the founder of the Jōdoshin school of Japanese Buddhism. He traveled throughout Japan with his father Kakunyo, and wrote many books to spread Shinran's doctrine.

This paper will analyze his reason for writing the *Hōonki*. Zonkaku believed that filial piety in Buddhism is better than filial piety in Confucianism. In Confucianism filial piety brings happiness in this life, but in Buddhism filial piety brings happiness in both this life and the life to come. Nembutsu is the best expression of filial piety.

38. The Change of Time in Shinran's Thought: from the moment of death to the present life

Mikio TAKEDA

In my paper I wish to discuss Shinran's idea of the change of time. Shinran

states:

The person who lives true shinjin, however, abides in the stage of the truly settled, for he has already been grasped, never to be abandoned. There is no need to wait in anticipation for the moment of death, no need to rely on Amida's coming. At the time shinjin becomes settled, birth too becomes settled (*Letters of Shinran*, Hongwanji International Center, 1978: 20)

Shinran emphasizes that there is no need to rely on Amida's coming at the moment of death. In this passage we can find that Shinran made clear the truth of salvation in the present life. This change of salvation's time — from the moment of death to the present life — is Shinran's idea of the change of time.

39. The Criticism of Faith in the Chapter on the Transformed Buddha-Bodies and Lands: With reference to the Chapter of Non-Meditative Practice in the *Commentary on the Contemplation Sūtra*

Eshin Itō

This essay intends to discuss the subject of the criticism of faith through Shan-tao's treatment in the "Chapter of Non-meditative Practice" which Shinran quoted in the "Chapter of the Transformed Buddha-Bodies and Lands" of the *Kyōgyōshinshō*. Hereby, I want to investigate the characteristic or the difference of faith of all creatures that Shinran clarified in the "Chapter of the Transformed Buddha-Bodies and Lands."

40. On Compassion in the Fourth Passage of the *Tannishō*

Toshiaki MIHARU

The Japanese phrase, *Kono jihi shijūnashi* in the fourth passage of the *Tannishō*, has been understood to mean that our compassion is not through-going. But in my opinion it means that it is endless. *Tannishō* collects Shinran's sayings. By reading this book, we understand that Shinran is a man of compassion.